

拾って、描いて、地球を救え！ わたしも変わる対話型ゴミ拾いプログラム

01 実施の目的と概要

項目	内容
イベント名	わたしも変わる対話型ゴミ拾いプログラム うみごme
開催日	2025年11月22、23日
会場	岡山市立大元公民館・人と科学の未来館サイピア
主催	小学生環境活動家Crew
協力	issue+design（プログラム協力）、人と科学の未来館サイピア、NPO法人まんなか
取材	OHK岡山放送、KSB瀬戸内海放送



02 活動プログラムと実施のプロセス



1. オリエンテーション：活動の目的共有

主催者（Crew）より開会の挨拶を行い、本プログラムの主旨を説明。単なる清掃活動に留まらず、海洋ゴミ問題の根本解決に向けた「意識の変容」と「ゴミの抑制」を目的とすることを共有し、活動のゴールを明確化しました。

2. チームビルディング：役割の決定

参加者を2つのグループに分け、主体的な参加を促すために役割（ゴミ拾い、場所や種類の記録、活動風景の撮影）を決定。チームで協力して調査を行う「調査員」としての意識を高めました。

3. フィールドワーク：地域清掃・調査活動

会場周辺でのゴミ拾いを実施。落ちている場所やゴミの状態、周辺環境を詳しく観察しながら収集を行いました。「どこに、何が、なぜ落ちているのか」という問いを持ちながら街を歩くことで、普段見落としがちな現状を肌で感じる機会となりました。

4. リフレクション：集約と現状分析

回収したゴミを一箇所に集約し、種類や量、劣化具合などを観察。拾った場所の傾向を振り返り、生活圏から海へと繋がるゴミの流れを客観的に把握しました。

5. 「うみごme」ワークショップ：対話による深掘り

issue+designのメソッドを用い、ゴミの背後にある「捨てた人の心理（うみごme）」を特定するワークを実施。「なぜこのゴミはここに存在するのか」を問い直し、自分たちの中にあるエゴを可視化。ゴミを「出さない」社会システムへの転換について、大人と子どもが対等に意見を交わす深い対話の場となりました。

03 参加状況

2025.11.22 大元公民館

大人	7
中学生	6
小学生	5
未就学児	2
合計(人)	20

2025.11.23 サイピア

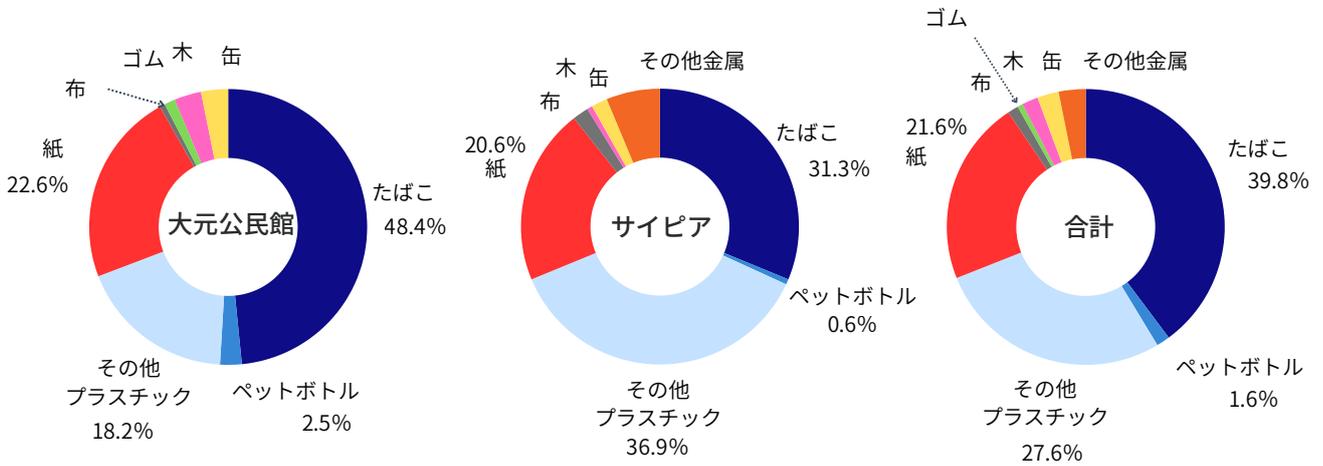
大人	10
中学生	3
小学生	7
未就学児	3
合計(人)	23

2025.11.23-24 合計

大人	17
中学生	9
小学生	12
未就学児	5
合計(人)	43

04 拾ったごみの分析 (種類・割合・数量)

※終了後の自発的回収分は、調査の厳密性を期すためデータには含めていない

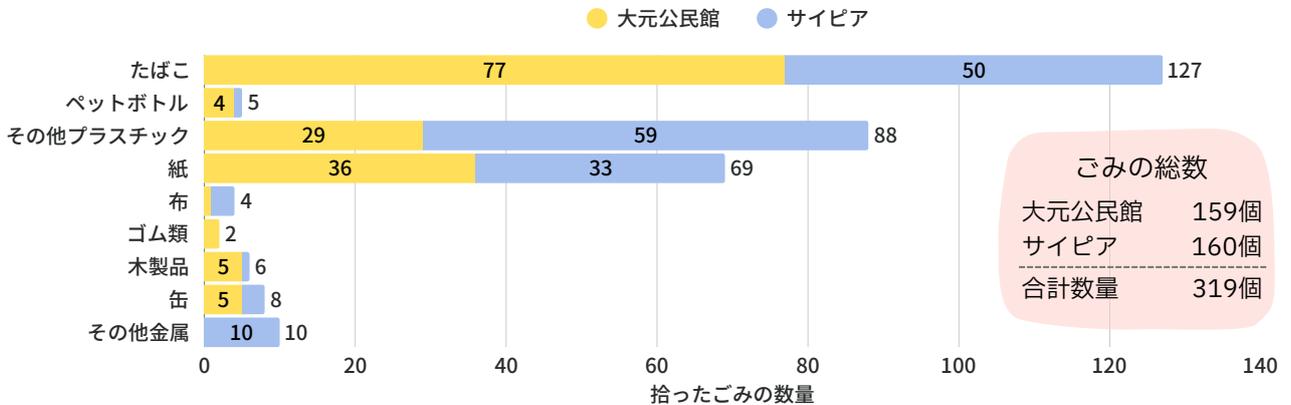


プラスチック 110個 69.1%

プラスチック 110個 68.8%

プラスチック 220個 69.0%

(プラスチック=タバコ+ペットボトル+その他プラスチック)



05 ごみの分布状況 (2025.11.22 大元公民館)



OHK岡山放送さま
KSB瀬戸内海放送さま
丁寧な取材を
ありがとうございました。



06 現場の現状とゴミの特性 (2025.11.22 大元公民館)



実態調査レポート

※不法投棄は逆に車・人通りが少ない場所

車も人も多い場所ほど目立つ「無意識のポイ捨て」

※

車の通行量や人の流れに比例して、ゴミの数は確実に増加します。特に信号待ちや渋滞が発生するポイントでは、タバコの吸い殻が目立ちます。それは悪意があるというより、ふとした瞬間の無意識なポイ捨てが、いつの間にか街の当たり前になってしまっていました。

これは車だけでなく、歩いている人も同じです。「人が集まり、動く場所」には、必ずといっていいほど無意識の跡が残っています。一つひとつは小さな「つつい」かもしれませんが、積み重なることで街の大きな課題を作り出していることを、歩みを止めて観察することで実感しました。



水門が語る、陸と海がつながる瞬間

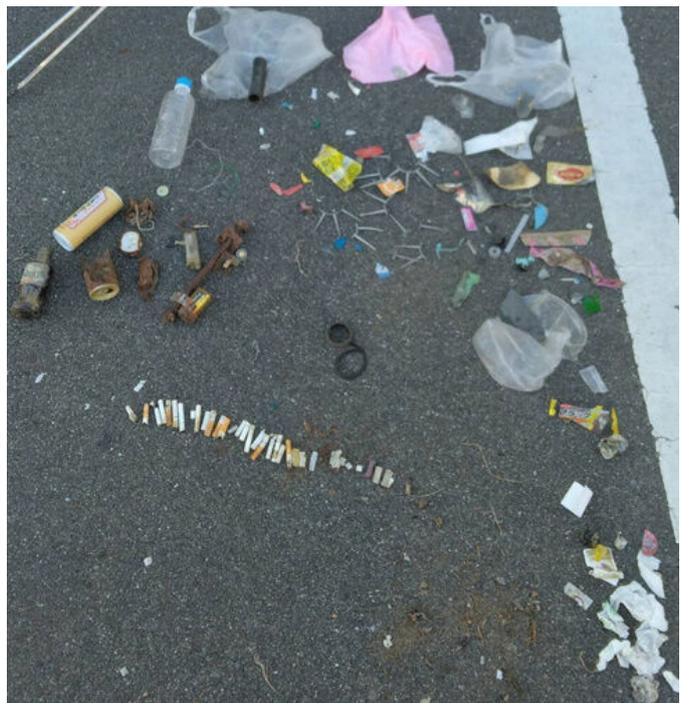
用水路の水門に溜まる大量のゴミを目の当たりにし、街に捨てられたゴミが確実に川を伝って海へと運ばれている現実を体感しました。ここは、街のゴミが「海洋ゴミ」へと変わる境界線でした。



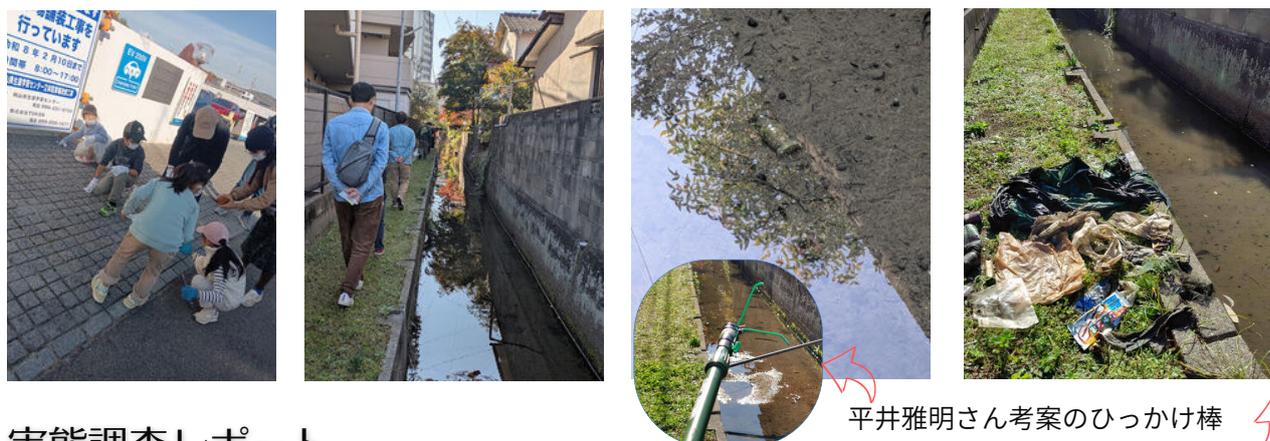
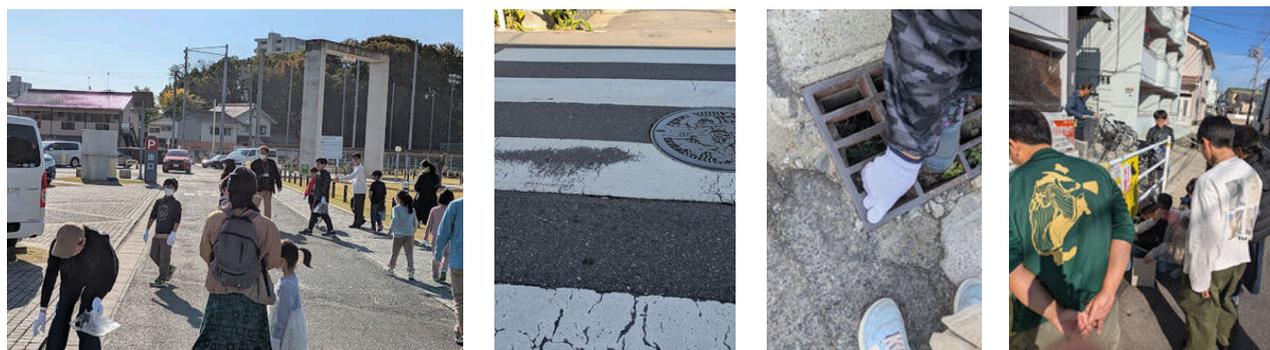
「学校まわり」ならでのゴミ

小学校周辺で、中身の文房具だけが抜き取られた「塾のチラシ袋」を発見しました。下校時の学生に配布したものが、そのままゴミの山につながっている。配り手と受け手のマナーのズレが、地域固有の課題として浮き彫りになりました。

05 ごみの分布状況 (2025.11.23 サイピア)



06 現場の現状とゴミの特性 (2025.11.23 サイピア)



実態調査レポート

平井雅明さん考案のひっかけ棒
用水路の水底から出てきたごみ

プラスチックゴミの変容：街の隙間で進む「見えない汚染」

吸い殻やレジ袋、お菓子の個包装に加え、日光でボロボロに劣化した「猫除けシート」などのプラスチックゴミが目立ちました。グレーチング（側溝の蓋）の中や道路の割れ目に風で運ばれたゴミが溜まり、すでに細かく碎けて「マイクロプラスチック」化しているものもありました。街の隙間は、海を汚す入り口になっていることを実感しました。

水辺で進む「ゴミの風化」と、回収の限界

水路の湿った土の上で見つかった、腐食してボロボロの空き缶。金属でさえ形を保てない過酷な環境で、プラスチックは決して消えることなく、細かな破片（マイクロプラスチック）となって環境を壊し続けます。一度劣化が始まり、自然の中に散らばったゴミをすべて回収するのは不可能です。現場でゴミが崩れていく様子を見て、私たちは「拾うことの限界」と「取り返しがつかないタイムリミット」を改めて肌で感じました。



イベント後、活動の大先輩である平井さんが、自作のひっかけ棒で用水路の水底のゴミを回収してくださいました。

実は私たちも拾いたい衝動と、安全・時間のルールとの間で「もどかしさ」を感じていました。平井さんはそんな葛藤を汲み取り、迷わず手を伸ばしてくれました。多くを語らず、行動で『答え』を示してくれたその背中に、私たちは大切なことを教わった気がします。

引き上げられたゴミは、データ（数字）には残りません。でも、「現状を見て、自ら動く」。その姿こそが、私たちが一番大切にしたい活動の原点でした。



07 うみごmeワーク

海ごみの8割は、私たちが暮らす「陸」から生まれる

拾ったゴミの背景を読み解くワークを行いました。なぜゴミが落ちていたのか？その裏側にある「何気ない身勝手な気持ち」を言語化し、キャラクター化していく。それは、海ごみを生み出している社会の仕組み、そして自分自身の心のあり方と真っ直ぐに向き合う時間でした。



「うみごme」の分類と、新種の誕生

印象に残ったゴミを、代表的な15種類の「うみごme」に分類。既存の枠にはまらない特殊なゴミは、そのストーリーを込めて「新種」として誕生させました。ゴミを「私たちの内面を映し出す鏡」として捉え直しました。

ひきよせられゴミ（たばこの吸い殻）

交通量の多い大通りの端に、まるで磁石に吸い寄せられるように溜まっていたゴミ。「つつい」という無意識な行動や習慣が、特定の場所にゴミを集中させている。

用なしごみ（塾のチラシ）※新種 学校周辺で発見。

中身の文房具だけが抜き取られ、袋とチラシだけが捨てられていた。「欲しいところだけ取って、あとはポイ」という人間の身勝手な気持ちを象徴する、まさに今回の調査を象徴する新種！

でも、よく考えればタバコもチラシも同じです。人間にとって「大切になくなった（用なし）」瞬間に、それはゴミに変わってしまう。「大切なものは、みんな家に持ち帰るはず。道にあるものは、全部『用なし』にされてしまったものなんだ」。そんな気づきが、Crewの中から生まれました。

※ワークショップではたばこの吸い殻のごみを「見捨てちゃだめよゴミ」とネーミングしました。

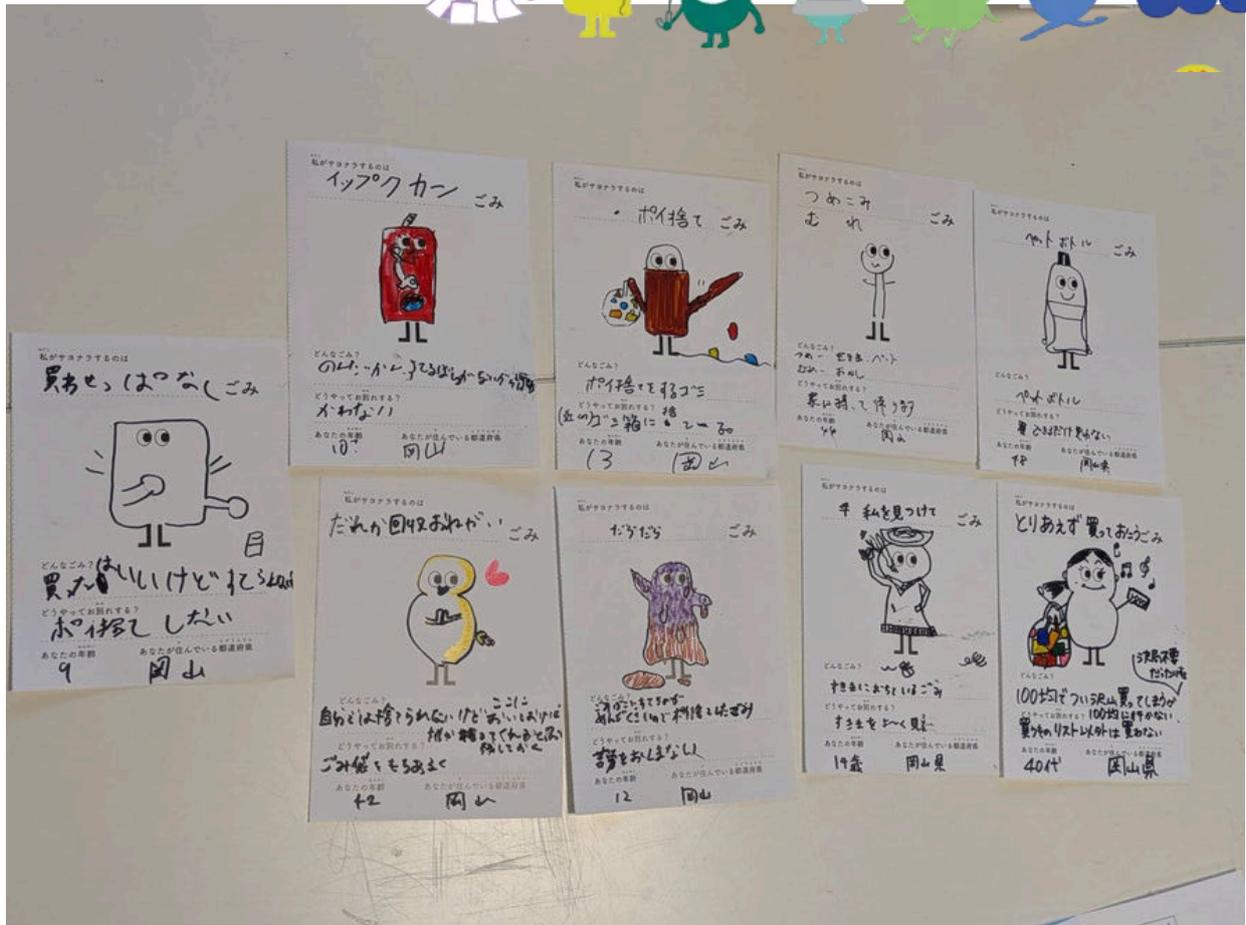


決別を誓う「封印の儀式」

ワークの最後は、自分たちで見える化した身勝手な気持ちや社会の課題を、サヨナラする「封印の儀式」を行いました。それぞれが描いたうみごmeを、「二度と同じゴミを生み出さない」という誓いを込めて封印します。



うみごme (一部)



08 Crewとしての提言：ゴミの「入口」を閉ざすために

ゴミを「捨てる」から「出さない」街へ。

——「出口」ではなく「入口」を変える



今回の調査を通して、私たちは「捨てることには限界がある」という現実を改めて突きつけられました。一度街に放たれ、隙間に入り込み、用水路を経て劣化が始まったゴミをすべて回収することは、物理的に不可能です。

海や川へ流れたゴミを追いかける「出口」の対策だけでは、この課題は決して解決しません。今、私たちが取り組むことは、ゴミが生まれる「入口」を根本から変えるアクションです。

具体的には、以下の仕組み作りに注力します

- 「ゴミにならない配布方法」の提案：
学校周辺での配布物について、企業側へ配り方の改善を働きかける。
- 「捨てない環境・ルール」の構築：
個人の意識に頼るだけでなく、社会全体でゴミを流さない仕組みを構築。



ゴミの「出口」で待つのではなく、配り方や捨てる方のルール、そして私たちの意識といった「入口」を根本から変える。この挑戦こそが、本質的な解決への一歩だと確信しています。

今後もワークショップなどを通じて、現状を知らない人たちに知ってもらおう活動をしていきます、



無意識を「選ぶ意識」へ

プラスチック製品との付き合い方も、大きな「入口」のひとつです。イベント後の振り返りでは、「マイボトルに切り替える」「本当に必要か考えてから買う」といった声が次々と上がりました。

「無意識に手に入れる」から「意識して選ぶ」へ。

自分が何を手に取り、それがどう処分されるのか。その後のストーリーを想像して動くことが、最大のゴミ抑制に繋がると実感しています。



知ることで、社会は変えられる

街の現状を知り、自分の無意識な行動に気づく。

そのプロセスさえあれば、人は自発的に「自分にできること」を考え、行動を変えていけます。私たちCrewは、これからも「出口」で拾い続けながら、それ以上に「入口」を閉ざしていくための発信と挑戦を続けていきます。



気づきと改善点

両日とも参加者の活動意欲が非常に高く、スタート地点までの移動中も熱心にゴミ拾いが行われた。その結果、本来の調査コースを全て回りきることができなかった。移動中は「観察」をメインとし、実際の「収集」は目的地から開始するようメリハリをつける。運用ルールを設け、調査データの精度と時間管理を両立させる。

Special Thanks

私たちは、issue+designさんの白木さんとプログラムが大好きで、岡山で開催されるたびに何度も通い詰めました。自分たちも「ゴミをキャラクター化して伝えたい」と悩んでいた時に会ったのが、この「うみごme」でした。試作段階だと言われていましたが、すでに完成されたその世界観に、感激と感動でいっぱいになったことを今でも覚えています。憧れのプログラムを、この岡山で、しかも私たちCrewの本格的な初イベントとして開催できたことは、本当に幸せで、うれしくてたまりません。私たちの「想い」を形にするきっかけをくださり、本当にありがとうございました。

そして、遠方から駆けつけてくださった笹本さん。2日間、40名以上の参加者の方々へ、熱く、そして最高に楽しくプログラムを届けてくださり、本当にありがとうございました。笹本さんの情熱があったからこそ、会場全体が一つになれたのだと思います。ありがとうございます。



本活動の主旨にご賛同いただき、多大なるご協力を賜りました皆さまに心より感謝申し上げます。

- ご協力：

- 人と科学の未来館サイピア 様
- NPO法人まんなか 様



- 取材：

- OHK岡山放送 様

<https://www.ohk.co.jp/data/26-20251129-00000001/pages/>

<https://news.yahoo.co.jp/articles/2a82809e94b86d26819b4555089c7d11f8865ce4>

- KSB瀬戸内海放送 様

<https://news.ksb.co.jp/article/16176606>

<https://news.yahoo.co.jp/articles/66c290b41c21419de8bc9abcfe3ab0f321af534c>



私たちの活動に共感し、専門的な知見や活動の場を貸してくださった皆さま、そしてメディアを通じて私たちの想いを広く届けてくださった皆さまの支えがあったからこそ、この活動は単なるゴミ拾いを越えた「未来へのアクション」となりました。本当にありがとうございました。



そして、イベントにご参加いただいた皆さま、興味を持ってくださった皆さま、SNS等でシェアをしてくださった皆さま。

みなさまからいただいた、たくさんの応援と温かい言葉が、私たちCrewの何よりの力になりました。

みなさまに支えられて、Crewは最高のスタートを切ることができました。この調査で得た確信を胸に、これからも街の「入口」を変えるための挑戦を続けていきます。

本当にありがとうございました！

THANK
YOU!
♥